投稿

大都市独居高齢者における子どもの有無，子どもとの関係が日常生活満足度および全体的生活満足度に及ぼす影響

林（イム） 暁淵（ヒョヨン）＊1　岡田（オカダ） 進一（シンイチ）＊2　白澤（シラサワ） 政和（マサカズ）＊3

目的　大都市独居高齢者の子どもの有無，子どもとの関係が彼らの日常生活満足度および全体的生活満足度にどのような関連があるのかを明らかにすることを目的とする。

方法　調査対象は，無作為抽出による大阪市居住の65歳以上の独居高齢者1,020名であった。調査方法は，郵送による横断的調査法を用いた。有効回収率は，51.6%（526名）であった。分析方法は，①子どもの有無によって独居高齢者の日常生活満足度および全体的生活満足度に違いがみられるかを検討するため，子どもの有無を独立変数，日常生活満足度の各生活領域ごとの総得点および全体的生活満足度の得点を従属変数とするｔ検定を行った。②子どもとの関係が独居高齢者の日常生活満足度および全体的生活の満足度に与える影響をみるために，子どもとの関係とコントロール変数として性別，年齢，暮らし向き，主観的健康度を独立変数，日常生活満足度の各生活領域ごとの総得点および全体的生活満足度の得点を従属変数とする重回帰分析を行った。性別（男性＝０，女性＝１），暮らし向き（低位群＝０，高位群＝１），主観的健康度（低位群＝０，高位群＝１）はダミー変数を用いた。

結果　ｔ検定の結果，子どものいる独居高齢者が子どものいない独居高齢者より，「対人関係（$p<0.01$）」「居住環境（$p<0.01$）」「食事（$p<0.05$）」領域における満足度が高いといった結果が示された。また，重回帰分析の結果，子どもとの関わりについて普段うまくいっていると認識しているほど，「対人関係（$p<0.001$）」「居住環境（$p<0.01$）」「食事（$p<0.01$）」「睡眠（$p<0.05$）」「家事（$p<0.05$）」領域における満足度と「全体的生活満足度（$p<0.001$）」が高いことが明らかになった。このような結果から，子どもの有無が高齢期の生活に密接に関連していること，子どもがいても子どもとの関係が断絶されることは，独居高齢者の生活にさまざまな困難をもたらす可能性が高くなることが示唆された。

結論　独居高齢者の生活の質を高めるために，子どものいない独居高齢者には補完システムを地域社会で作っていくこと，子どものいる独居高齢者には子どもとの情緒的連帯感を高められるような支援を配慮していくことが求められる。

キーワード　独居高齢者，子どもの有無，子どもとの関係，日常生活満足度，全体的生活満足度

Ⅰ　は　じ　め　に

高齢化の進展と核家族化に伴い，子どもと同居する高齢者は年々減少し，夫婦のみの高齢者や独居高齢者の増加が注目されている。2006年版国民衛生の動向によると，独居高齢者，すなわち，高齢者単独世帯数は2005年406万９千世帯であり，1995年219万９千世帯に比較し，こ

＊１大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程
＊２大阪市立大学大学院生活科学研究科准教授　　＊３同教授

の10年でほぼ倍増している[1]。さらに，今後も増加を続けて，2020年には男性で176万人，女性で350万人の526万人に達するものと予測されている[2]。

平成13年に策定された高齢社会対策大綱は「分野別の基本施策の枠を超えて横断的に取り組む課題」として４つを挙げているが，そのうちの１つが「多様なライフスタイルを可能にする高齢期の自立支援」であった。これをうけて内閣府は，特に今後増加が見込まれる高齢者の類型として３つを挙げているが，その１つが「ひとり暮らし高齢者」である[3]。このような動きから，ひとり暮らし高齢者を高齢者の１つのライフスタイルとみなし，注目していくことが求められる。独居高齢者は，一人で暮らすことに不安を感じながらも，一人で暮らしていきたいという意識を持っている高齢者が多いことからも[4]，今後も増え続けるものと予測される。ひとり暮らしでも安心して暮らせるための生活支援をどのように展開するかが今後の課題であり，彼らに対する情報を蓄積していくことが求められる。

高齢者にとっての対人関係の重要性は多くの先行研究から確認されている。特に，子どもが高齢者の生活に大きな影響を与えていることはよく知られていることである。さらに，日本の高齢者の持つネットワークの構造が子どもを中心としたものであることも指摘されているなか[5]，子どもがいながら別居し，一人で暮らす高齢者が子どもとどのような関係を持ちながら暮らしているのかは，独居高齢者の生活に大きく影響すると予想される。したがって，独居高齢者とその子どもとの関係を把握していくことは，今後の独居高齢者の生活支援のあり方を考えていくうえで，非常に重要な手がかりになると考えられる。

Shanas は，高齢者と成人の子どもとの間を左右する最も重要な要素は，既婚子と同居するか否かではなく親子間の情緒的連帯感であることを強調している[6]。そのため，子どもとの関係において同居か別居かという居住形態ではなく，ふだん子どもとどのような関係を維持しながら生活しているのかが，高齢者の生活により深く関連することが推測される。特に，親子間の相互作用の質的な側面こそ，高齢者の生活満足度を理解する重要な要因であるとの見解もみられるため[7]，親子間の交流について高齢者がどのように認識しているのか，そして，そのようなことが独居高齢者の日常生活にどのような影響を与えるのかを実証的な研究を通して明らかにする必要があると考えられる。

本研究においては，独居高齢者の子どもの有無および子どもとの関係が彼らの日常生活満足度と全体的生活満足度にどのような関連があるのかを明らかにすることを目的とし，独居高齢者の地域生活を支援していくうえで，援助専門職として関わっていく際に配慮すべき側面を提案することとする。

Ⅱ 研 究 方 法

（１） 対象と方法

調査対象者は，大阪市に居住している65歳以上の独居高齢者1,020名である。サンプリングは，初めに，大阪市24区を人口比例により５つのグループに分け，それぞれのグループから１つの区を無作為に抽出し，次に，それぞれ抽出された区（合計５区）の住民基本台帳から独居高齢者をリストアップし，1,020名の独居高齢者を無作為に抽出した。調査方法は，自記式質問紙を用いた郵送調査とした。調査期間は，2002年４月15日から30日であった。有効回収率は51.6%（526名）であった。

なお，調査の際に，調査対象者に対し，協力依頼文書にて協力ができない場合は回答しなくてよいこと，回答されたデータは統計的に処理し，個人を特定することはないことを示した。協力が得られる場合は，調査票を無記名の状態で同封した返信用封筒により返送するよう依頼した。

（２） 調査内容

調査内容は，基本属性，子どもの有無，子どもとの関係における満足度，日常生活満足度，

全体的生活満足度とした。

1） 基本属性

性別，年齢，暮らし向き，主観的健康度，最終学歴，主な生計手段，独居理由を尋ねた。

2） 子どもの有無，子どもとの関係

子どもの有無，子どもとの関係を尋ねた。子どもとの関係は，「子どもとの関係はうまくいっていると思いますか」という質問とし，ほとんどそう思わない（１点），あまりそう思わない（２点），どちらともいえない（３点），まあまあそう思う（４点），かなりそう思うの（５点）の５段階で回答を得た。

3） 日常生活満足度

在宅で暮らしている高齢者にとっての日常生活の領域を設定し，それぞれの領域ごとの総得点を用いた。この尺度においては，総得点が高いほど満足度が高くなるようにした。在宅高齢者の日常生活として設定した領域は，「対人関係（３項目）」「睡眠（２項目）」「食事（３項目）」「家事（３項目）」「居住環境（３項目）」「社会参加活動（３項目）」「清潔維持（２項目）」「経済（２項目）」の８つの領域である。各々の項目は，高齢者の主観的判断により，ほとんどそう思わない（１点），あまりそう思わない（２点），どちらともいえない（３点），まあまあそう思う（４点），かなりそう思うの（５点）の５段階で回答を得た。なお，これらの尺度については，因子分析による内容的妥当性と内的一貫性を示すクロンバッハのαによる信頼性の確認を行い，本尺度の妥当性および信頼性を確保している。

4） 全体的生活満足度

全体的生活満足度は，「現在の生活に満足されていますか」という質問とし，かなり不満がある（１点），少し不満がある（２点），どちらともいえない（３点），まあまあ満足している（４点），大変満足している（５点）の５段階で回答を得た。

表１ 調査対象者の基本属性

	男性	女性
性	133(25.7)	385(74.5)
年齢（歳）[1]	73.2± 6.0	74.7± 6.4
独居期間（年）[2]	15.7±12.4	13.7±10.5
最終学歴		
中学校	65(49.2)	191(50.4)
高等学校	56(42.4)	158(41.7)
短期大学	6(4.5)	20(5.3)
大学	4(3.0)	4(1.1)
その他	1(0.8)	6(1.6)
主観的健康度		
全く健康ではない	18(13.5)	25(6.6)
あまり健康ではない	55(41.4)	118(31.1)
まあ健康である	59(44.4)	214(56.3)
非常に健康である	1(0.8)	23(6.1)
暮らし向き		
上	1(0.8)	3(0.8)
中	48(37.8)	195(54.0)
下	78(61.4)	163(45.2)
主な生計手段		
就業による収入	4(3.1)	14(3.8)
年金	98(77.2)	305(83.8)
子どもからの援助	5(3.9)	6(1.6)
貯蓄・財産収入	2(1.6)	21(5.8)
生活保護	16(12.6)	17(4.7)
その他	2(1.6)	1(0.3)
子どもがいながら独居する理由		
健康だから	11(14.9)	61(22.7)
別に暮らすほうが気楽だから	33(44.6)	101(37.5)
今いる場所を離れたくないから	4(5.4)	37(13.8)
子どもの仕事の都合から	5(6.8)	22(8.2)
住宅の都合から	12(16.2)	20(7.4)
親子では考え方や生活の仕方が違うから	5(6.8)	19(7.1)
その他	4(5.4)	9(3.3)

注 1)，2)は平均値±標準偏差，それ以外は度数（%）

（３） 分析方法

1） 子どもの有無によって独居高齢者の日常生活満足度および全体的生活満足度に違いがみられるかを検討するため，子どもの有無を独立変数，日常生活満足度の各生活領域ごとの総得点および全体的生活満足度の得点を従属変数とする単変量分析のｔ検定を行った。

2） 子どもとの関係が独居高齢者の日常生活満足度および全体的生活の満足度に与える影響をみるために，子どもとの関係とコントロール変数として性別，年齢，暮らし向き，主観的健康度を独立変数，日常生活満足度の各生活領域ごとの総得点および全体的生活満足度の得点を従属変数とする重回帰分析を行った。性別（男性＝０，女性＝１），暮らし向き（低位群＝０，高位群＝１），主観的健康度（低位群＝０，高位群＝１）はダミー変数を用いた。なお，調査結果の分析には，統計ソフト SPSS 10.0 for Windows を用いた。

Ⅲ 結　　果

（１） 分析対象者の概要

性別では，男性が25.7%，女性が74.5%であった。平均年齢は，男性が73.2歳，女性が74.7歳，平均独居期間は，男性が15.7年，女性が13.7年であった。最終学歴は，男性の49.2%，女性の50.4%が中学校卒であった。主観的健康度は，男性の44.4%，女性の56.3%がまあ健康であると回答した。暮らし向きでは，女性は54.0%と中の回答が最も多く，男性は61.4%と下の回答が最も多かった。主な生計手段を尋ねたところ，男性の77.2%，女性の83.8%が年金を挙げていた。子どもがいながら独居している理由については，男性の44.6%，女性の37.5%が別に暮らすほうが気楽だからと回答した（表１）。

（２） 子どもの有無，子どもとの関係および日常生活満足度，全体的生活満足度の記述統計量

子どもの有無では，子どものいる者が371人（79.4%），子どものいない者が96人（20.6%）であった。子どもとの関係はうまくいっていると思うかを尋ねたところ，子どもとの関係の平均値は4.5点で，調査対象者の多くの人が子どもとの関係において肯定的な回答を示した。

次に，日常生活満足度の領域ごとの合計総得点を項目数で割った平均値をみると，「清潔維持」領域における満足度が4.4点と最も高く，「社会参加」領域における満足度が2.2点と最も低い平均値を示した。全体的生活満足度の平均値は，3.5点であった（表２）。

表２　子どもの有無，子どもとの関係および日常生活満足度，全体的生活満足度の記述統計量

	合計総得点の平均値±標準偏差[1)2)]
子どもの有無	
いる：371人(79.4%)　いない：96人（20.6%）	
子どもとの関係	4.5±0.7
子どもとの関係はうまくいっていると思いますか	4.5点
日常生活満足度	
食事	
栄養に偏りのない食事がとれていると思いますか	11.7±2.6
口にあった食事をとれていると思いますか	3.9点
楽しく食事をとれていらっしゃいますか	
経済	
今の収入で充分生活ができますか	5.6±2.0
いざという時の充分な貯えだと思われますか	2.9点
対人関係	
親戚づきあいはうまくいっていると思いますか	12.1±2.7
近所づきあいはうまくいっていると思いますか	4.0点
友人とのつきあいはうまくいっていると思いますか	
社会参加	
町の祭りや行事などであなたは必要とされていると思われますか	6.8±2.9
近所の人に頼りにされていると思われますか	2.2点
趣味や習い事，もしくは勉強会，ボランティア活動に進んで参加されていますか	
家事	
洗濯のことで何かお困りのことはありますか[3)]	11.3±3.2
掃除のことで何かお困りのことはありますか[3)]	3.8点
食事の支度で何かお困りのことはありますか[3)]	
睡眠	
自分は寝つきは良い方だと思われますか	7.0±2.2
夜はぐっすり眠れますか	3.5点
居住環境	
あなたの家が建っている場所は，生活するのに便利なところですか	12.2±2.2
外出の際の交通手段は便利だと思われますか	4.1点
今の家は住みやすいと思われますか	
清潔維持	
身につけている肌着は快適だと思われますか	8.6±1.4
自分の身なりを整えることができていると思われますか	4.4点
全体的生活満足度	3.5±1.0
現在の生活に満足されていますか	3.5点

注　1)　合計総得点は，子どもとの関係，全体的生活満足度は１項目５点満点，日常生活満足度の経済，社会参加，睡眠，清潔維持は２項目10点満点，食事，対人関係，家事，居住環境は３項目15点満点である。
　　2)　合計総得点の平均値÷項目数
　　3)　得点化する際に選択肢を反転し，得点が高くなるほど満足度が高くなるようにした。

表３　子どもの有無と日常生活満足度および全体的生活満足度の関連

	子どもがいる者[4)]	子どもがいない者[4)]	有意差
日常生活満足度			
家事	11.3	11.1	n.s
食事	11.9	11.3	＊
社会参加	6.9	6.4	n.s
対人関係	12.3	11.1	＊＊
居住環境	12.3	11.5	＊＊
睡眠	7.0	6.9	n.s
清潔維持	8.7	8.5	n.s
経済	5.9	5.8	n.s
全体的生活満足度	3.6	3.4	n.s

注　1)　＊＊＊$p<0.001$，＊＊$p<0.01$，＊$p<0.05$
　　2)　独立変数：子どもの有無
　　3)　従属変数：家事，食事，社会参加，対人関係，居住環境，睡眠，清潔維持，経済領域の合計総得点
　　4)　平均値

（３） 子どもの有無と日常生活満足度および全体的生活満足度の関連

ｔ検定の結果，子どもの有無と「対人関係」「居住環境」「食事」領域における満足度において有意な関連がみられ，子どものいる独居高齢者が子どものいない独居高齢者より「対人関係」「居住環境」「食事」領域において高く満足していることが示された。また，「清潔維持」「家事」「経済」「社会参加活動」「睡眠」および全体的生活満足度に子どもの有無による統計的に有意な差はみられなかった（表３）。

（４） 子どもとの関係と日常生活満足度および全体的生活満足度の関連

重回帰分析の結果，子どもとの関係と「対人関係」「居住環境」「家事」「睡眠」「食事」の日常生活領域と全体的生活満足度において有意な正の関連がみられ，子どもとの関係における満足度が高いほど，「対人関係」「居住環境」「家事」「睡眠」「食事」の日常生活領域の満足度と全体的生活満足度が高いことが示された。なお，「対人関係」領域および全体的生活満足度においては0.1％水準で，「居住環境」「食事」領域においては１％水準で，「家事」「睡眠」領域において５％水準で有意な関連がみられた（表４）。

Ⅳ 考　　察

（１） 子どもの有無と日常生活満足度および全体的生活満足度との関連

子どもの有無によって独居高齢者の日常生活満足度および全体的生活満足度に違いがあるかを検討した。その結果，子どものいる独居高齢者が，「対人関係」「居住環境」「食事」の領域において，子どものいない独居高齢者より満足度が高いことが示された。すなわち，子どものいる独居高齢者が子どものいない独居高齢者より，親戚・友人・近隣との付き合いがうまくいっていると思っていること，今の家が住みやすい・使いやすい・生活に便利であると思っていること，栄養や口にあった食事を楽しみながらとっていることが示された。

先行研究により，日本の高齢者の満足感，孤独感に大きな影響を与えるのは，配偶者よりも子どもとの接触関係であることが報告されている[8]。これは日本の高齢者の情緒に子どものもつ存在感が大きいということが示されている結果である。また，内閣府の「ひとり暮らし高齢者に関する意識調査」において，主な相談相手として６割が子どもをあげるなど[9]，独居高齢者にとって子どもという存在がもつ意味の大きさがよくわかる。さらに，家族からのサポートが高齢者の心理的な安定，加齢に対する態度，人生の受容に直間接的に影響するとされている[10]。そのような意味で，同居する配偶者はも

表４　子どもとの関係が日常生活満足度および全体的生活

	日常生活					
	家事	食事	社会参加活動	対人関係	居住環境	睡眠
子どもとの関係	0.084*	0.118**	0.027	0.264***	0.145**	0.107*
性別（男性＝０）	0.197***	0.258***	0.164***	0.280***	0.102*	−0.032
年齢	−0.144***	0.064	−0.092*	0.010	0.075	0.048
暮らし向き（０＝低位群）	0.037	0.138***	0.171***	0.137**	0.121**	0.162***
主観的健康度（０＝低位群）	0.361***	0.217***	0.167***	0.175***	0.183***	0.244***
Ｆ値	29.957***	26.328***	13.305***	28.555***	13.434***	13.400***
決定係数	0.238	0.215	0.122	0.284	0.123	0.122

注　1)　値は，標準化係数（ベータ）有意差
　　2)　＊＊＊$p<0.001$，＊＊$p<0.01$，＊$p<0.05$
　　3)　独立変数：子どもとの関係，性別，年齢，暮らし向き，主観的健康度
　　4)　従属変数：家事，食事，社会参加，対人関係，居住環境，睡眠，清潔維持，経済領域，全体的生活満足度の合計総得点

ちろん子どももいない独居高齢者は高齢期の生活に何らかの不適応的な側面を抱えやすいと思われる。本研究でも，子どものいない独居高齢者が対人関係，食事，居住環境の最も身近な日常生活において困難を抱えやすいことが示された。したがって，子どもの有無が高齢期の生活に密接に関連していることが伺える。

未婚や結婚しても子どもを生まない夫婦が増えている状況から，今後も独居高齢者の増加とともに子どものいない独居高齢者が増えていくことが予測される。このような子どものいない独居高齢者の生活を支援するためには，子どもの役割を補完できるフォーマル・インフォーマルシステムを地域社会で作っていくことが求められる。

なお，全体的生活満足度においては，子どものいる独居高齢者が平均値においては若干高い数値がみられたが，統計的に有意な差はみられなかった。

（２） 子どもとの関係と日常生活満足度および全体的生活満足度の関連

子どもの有無だけではなく，子どものいる高齢者のうち，普段子どもとどのような関係を維持しているのかが，彼らの日常生活満足度および全体的生活満足度にどのような関連があるのかを検討した。

先行研究により，高齢者は子どもまたは孫との間における相互関係に対する連帯感が高いと知覚すればするほど，主観的幸福感が高いとされている[11]。本研究の結果でも，子どもとの関係をどのように維持しているのかが，独居高齢者のふだんの生活に幅広く影響していることを理解することができる。睡眠や食事のように高齢者の身体的・精神的な健康に直接つながっている領域はもちろん，日常生活維持に関わる家事や居住環境，高齢者を取り巻く重要な他者との関わりにまで，身体的・精神的・社会環境的な側面の生活全般にわたって関連していることがわかる。さらに，現在の生活に満足しているという全体的生活満足度にも関連していた。子どもの有無によっては独居高齢者の全体的生活満足度に差はみられなかったが，子どもとの関係における満足度が高いほど，全体的な生活にも満足していたということは，子どもとどのような関係を維持しているかが，普段の生活に大きな影響を与えていることが伺える。

直井らの研究においては，子どもの有無，別居子との交流頻度によってはモラール（士気）に違いがなく，配偶者の有無によってモラールの差が認められたと報告している[12]。しかし，死別や離婚などにより同居する配偶者のいない独居高齢者にとっては，別居している子どもが最も重要なネットワークになることは確かである。そのために，子どもがいても子どもとの関係が断絶されることは，独居高齢者の生活にさまざまな困難をもたらす可能性が高くなると考えられる。

また，このような結果は，現代社会の変化，価値観の変化等から子どもとの物理的な同居よりは社会心理的な距離が高齢者の生活満足度に重要に作用すると考えられる。したがって，子どもとの意思疎通と接触を通して情緒的連帯感を高められるよう，生活支援に関わる際に配慮していくことが求められる。

満足度に及ぼす影響

満足度[1]		全体的生活満足度
清潔維持	経済	
0.002	0.062	0.159***
0.185***	0.038	0.234***
−0.081	0.118**	0.069
0.107*	0.400***	0.222***
0.202***	0.095	0.186***
12.695***	27.754***	31.783***
0.117	0.224	0.249

Ⅴ 結　　語

本研究の限界と今後の課題について簡単に述べる。第１に，本研究では，子どもとの関係が独居高齢者の生活にどのような関連があるのかを明らかにするため，高齢者側の要因のみを取

り上げていた。今後，子ども側の要因も取り上げ，ともに検討することが求められる。第２に，調査対象者が特定の大都市独居高齢者に限定されているため，大都市の独居高齢者全体に一般化することはできない。今後，他の大都市の独居高齢者に調査対象者を広げることが求められる。第３に，調査設計が横断的調査であったため，因果関係の証明ができない。今後，因果関係を明確にするためには，縦断的な調査の実施が求められる。

文　　献

１）財団法人厚生統計協会．国民衛生の動向・厚生の指標臨時増刊．2006；53：35-6.

２）直井道子．一人暮らし高齢者の指標．保健の科学 2003；45(12)：882-86.

３）直井道子：前掲書２）

４）矢川ひとみ．要介護状態にある独居高齢者の生活実態．松山東雲女子大学人文学部紀要　2005；13：115-34.

５）玉野和志，前田大作，野口裕二，他．日本の高齢者の社会的ネットワークについて．社会老年学 1989；30：27-36.

６）Shanas, L.S. The family as a social support system in old age. The Gerontologist 1979；19(２).

７）Mancini, V.A. Friend interaction, Competence and moral in old age.Research on Aging 1980；２：416-31.

８）湯沢擁彦．老人の孤独と家族との関係．臨床精神医学　1986；15：1773-８.

９）内閣府．一人暮らし高齢者に関する意識調査 2002.

10）柳澤理子，馬場雄司，伊藤千代子，他．家族および家族外からのソーシャルサポートと高齢者の心理的QOL. 日本公衆衛生学会誌　2002；49(８)：766-73.

11）Sohn.H.H, Yoon.C.H, Kim.D.S et al.An Ecological Approach to Study the Subjective Well-Being of the Disabled elderly. Journal of the Korea gerontological Society. 2000；20：93-112.

12）直井道子．都市居住高齢者の幸福感－家族・親族・友人の果たす役割－．総合都市研究　1990；39：149-59.